

1 第33回現代詩読書会：Denis Grozdanovitch (1946 -)

2016/6/27

担当者：森田俊吾

1.1 略歴

「最もニーチェ主義的なテニス選手」

1946年パリ生まれ。旧・高等映画学院卒。1963年のフランス国内テニスのジュニア・チャンピオン。スカッシュは1975年から1980年までフランス全国大会で優勝。ジュ・ド・ポームでも何度も優勝している。しかし、プロの道へは進まず、アマチュアでいることを好んだ。14歳の頃から、メモ帳に言葉を綴り、1994年にジャック・レダが編集長を務める『新フランス評論』に寄稿。2002年 *Petit traité de désinvolture* をジョゼ・コルティ社から出版。



Société des Gens de Lettres 賞を受賞し、批評的にも好評を博す。2006年に発表した *Brefs aperçus sur l'éternel féminin* で、Alexandre Vialatte 賞を受賞。『レキップ』や『リベラシオン』などの新聞でコラムを数多く書いている。2008年に初の詩集『事物の力 — ありふれた憂鬱の詩集』を発表。その後も精力的に執筆活動が続けている。

そこにある (être là) 力としての事物 (choses)

『事物の力』についてフランシス・ダンヌマルク (Francis Dannemark) は以下のように語る。

ドゥニ・グロズダノヴィッチの『事物の力』で、私が考えるのは絶えず同じ絵を描き直してきた極東の画家たちのことである。その絵は彼らの師と似たものであり、その師もまた先人から着想を受けているものであった。いかなる現代性の不安も彼らを煽ることなく、いかなる名誉欲も彼らの心を占めなかった。重要なのは長く続くことに関心を持ちながら、伝達することであり、現代的意義の霧の中に消え入ることではない。[...] 『事物の力』にあるのは、なんらかの非時間的なもの、そして幸福は大文字で書かれるものでは決してなく、たいていは我々の生活のもっとも人目を引かない瞬間に隠れているということを発見した者の気詰まりな微笑みだ。

詩集のエピグラフには劇作家ミシェル・ド・ゲルドロードの作品の一節が掲げられ、「事物」(Choses) という主題の導入がなされている。

私たちは万物のごく一部しか確信できないとしても、私は事物に対し、存在と同じ価値を与えていると思う。事物は独自の生を持っており、そこにはいささかの呪術もなく、私はそれが神秘的な力 (fluides) に溢れ、かつて事物を作り、利用した色あせた人文学の思想に富んだものだと思う — 作

り、利用された事物は引力によっても、斥力によっても、良い方にも悪い方にも働きかけ、反応するだろうし、さらにそれは吉でも凶でもなくなるだろう。事物が無関心になったり、生きながらえるのにうんざりしたりしない限りは。

1.2 主要著作

- *Petit traité de désinvolture*, José Corti, 2002.
- *Rêveurs et nageurs*, José Corti, 2005.
- *De l'art de prendre la balle au bond* : précis de mécanique gestuelle et spirituelle, J-C Lattès, 2007.
- *La faculté des choses : poèmes de la mélancolie ordinaire*, Le Castor Astral, 2008.
- *L'art difficile de ne presque rien faire*, Denoël, 2009.
- *Minuscules extases*, Nil éditions, 2009.
- *La secrète mélancolie des marionnettes*, L'Olivier, 2011.

1.3 参考サイト

Les clichés de Denis Grozdanovitch (<http://bibliobs.nouvelobs.com/beaux-livres/20120321.OBS4277/les-cliches-de-denis-grozdanovitch.html>)

1.4 Les Faculté des choses

序文

このテキストは、やや粗野に書かれている。こうした書き方は、正直に言うと、非詩的 (apoétique) で、非燃素的 (aphlogistique) であろうと欲したためである (« aphlogistique » とは、リトレの辞書によれば炎がなく燃えるという意味である)。この非^安燃^全素的なランプは炭^灯鉱員たちが、坑内でのガス爆発を避けるために使っていたものであった。実際、詩の内在性の坑道の底で誇張の炎によって引き起こされる突然のガス爆発の他に悲惨なことなどあるだろうか？ 同じような考え方で、こんな道教の古い諺がある。「燃えようとするものは輝かない (Qui veut briller n'éclaire pas)」〔老子の言葉「光而不耀」からか？——訳者注〕

D.G.

« Les faculté des choses »

J'étais monté à travers les buissons épineux les rochers
depuis le rivage abrupt où se balançait la houle bleue.
À mi-pente interloqué par une senteur sauvage entêtante.
Au sommet régnaient le vent la solitude
maigres végétations tourbillons de poussière

sous un soleil dru.

Debout au bord de la falaise en sandales presque
nu je contemplais les étendues marines striées de courants
le dôme parfait du ciel clôturant l'horizon.

J'essais d'avoir vingt ans de percer
un mince voile d'irréalité brouillant toute perception.

À cet instant (je m'en souviens avec précision)
me reviennent les paroles prononcées à l'université
par le pâle professeur aux yeux gris
au regard incertain timide
derrière d'épais verres de myopie.

« La beauté avait-il murmuré c'est peut-être
la faculté qu'ont les choses
d'être là ! »

事物の力

僕は登る 刺のある茂みを通っていくと 岩礁
それは切り立った海岸からある 青い波が揺れ動いていた。
坂の途中でまごついたのはある香りのせい 野生の くらりとくる。
頂上を支配していたのは風 孤独
まばらな植生 塵の旋風だった
燃え立つ太陽の下で。

断崖の縁で サンドルを履いて ほとんど裸で立ち
僕は流れが縞をつける海の広がりを感じて眺めていた
水平線を囲っている見事な蒼穹。

二十歳になってみようと 突き抜けてみようと
このあらゆる知覚を霞ませる非現実性という薄いヴェールを。
そのとき (僕はこのことをはっきりと覚えている)
大学で発せられた言葉が思い起こされた
灰色の目をした冴えない教授によって
不安で怯えた 眼差しで
近眼用の分厚い眼鏡の裏で
「美 と彼はつぶやいた それはおそらく
事物がそこにあるとする
能力だ！」

« Les cairns »

En haute montagne
pour jalonner le chemin à suivre
parmi les rocs entassés indistincts et les éboulis
de loin en loin ont été disposées
des colonnes de petites pierres
empliées les unes sur les autres dans un équilibre assez précaire
et qu'on nomme des cairns.

Au début ces minces édifices
peuvent facilement se confondre avec d'autres
accidentels

mais après quelques temps le regard exercé
identifie de très loin
l'apport sans équivoque de la main humaine.

Ces petits repères improvisés et assemblés à la hâte
par des randonneurs anonymes
à l'intention de leurs éventuels successeurs
représentent non seulement un réconfort
pour qui se sait guidé sur le droit chemin
mais encore il me semble quelque chose de plus essentiel :
un discret signe de reconnaissance.

Or tandis que je longeais l'un de ces sentiers escarpés
trébuchant parfois au bord de l'à-pic
et cherchant du regard le prochain cairn
(auquel au passage j'apportais ma contribution)
j'éprouvai soudain avec une joie secrète
la valeur de ce simple salut
que par delà le temps et les circonstances
s'adressent les uns aux autres *par petits cailloux interposés*

quelque « amis inconnus ».

積石塚

高山で

進むべき道の目印となるために

雑然と積み上げられた岩と堆積の間で

とびとびに配置されていた

小さな石でできた柱

それは実に不安定なバランスで次々と積み重ねられており

ひとはそれを積石塚と呼ぶ。

当初この取るに足らない建造物は

簡単に一緒にくたにされるだろう

偶然見かけた他のものと

けれどもしばらくすると鍛えられた眼差しが

遠くから見分ける

はっきりと 人間の手の恩恵を

大急ぎで集められた即席のこの小さな標識は

山野に行く見知らぬ人々によって

後に続くかもしれぬ人々のために

ある励ましを表している

自分が正しい道に導かれると知る人への

それだけではなく おそらく より本質的な何かをも

それは認識の慎しみ深い記号

ところで 僕が険しい畦道の一つに沿って行く間

時折絶壁の縁で躓きながら

そして次なる積石塚を目で探しながら

(その石積みに私も道中で協力した)

私は突然 隠された喜びでもって

この単純な挨拶の価値に気付いた

時と状況を越えて

お互いに伝え合う 小石を置くことで

それは誰か「見知らぬ友達」